プロローグ

その部屋は、十五畳ほどの大きさがあり、三方を厚い壁で、一方を強化ガラスによって囲まれている。

壁は表面こそ衝撃吸収素材で厚さ十センチほどおおわれているものの、内側は五十センチ以上のコンクリートで固められている。

窓は通常の防弾ガラスをさらに強化加工したもので、至近距離からの大口径ライフル弾の直撃をうけても貫通しない。

天井には、部屋のどの部分にも影を作らないよう配慮された照明が埋められ、作りだす光域の、最も明るくなる場所に一脚の椅子が固定されている。

その椅子に、ひとりの男が腰かけていた。

部屋の気密は完全に保たれている。閉回路の空気循環システムが作動している。循環システムの中に、一本の細いチューブが外部から流入し、このチューブの開閉バルブだけは室外から作動させることが可能だ。

現在このチューブのバルブは閉まっている。開かれた場合、短時間に青酸ガスが放出されれ、室内にいる生物を速やかに死に至らしめる。

男は全裸だった。その上、頭髪もすべてきれいに剃られている。

男の両腕と両足首は、それぞれすわっている椅子に固定され、そこから体温、脈拍、血圧をモニターする装置とつながっていた。さらに、男は知らなかったが、体表面の温度変化、発汗を検知する装置、さらに音声の抑揚による感情の変化を測定する装置も部屋にはおかれていた。

テープによる脳波測定コードの接着が、むきだしの男の頭皮にはほどこされている。

全裸であっても、彼が寒さを感じることはなかった。室温は二十五度Cに保たれていた。

強化ガラス壁の向こう側は、彼からは見通せなかった。彼は両眼とも一・二の視力があったが、見通すことはできないシステムになっている。

そのガラス壁の向こうには、彼の心と体の変化をモニターし記録するコンピュータユニットがぎっしりと並んでいた。そして医師とも技術者ともとれる白衣の人間たちと、軍人とも殺し屋ともとれる屈強な男たちがたたずんでいる。

男の意識は明瞭だった。わずかに緊張はしているが、不安を抱いているようすはない。まっすぐにガラス壁を見つめているので、そのこちら側にいる何名かは、彼から自分が見えているかのような不安を感じていた。

モニター類は、彼が見かけ通り、健康体の人間であることを証明する数値を表示していた。

そのことと、彼が現在おかれている立場は無関係だった。
彼がしたのと同じ経験を得た人間ほ、この地上にはひとりも存在しなかった。
ガラス壁の向こう側に立つ人間たちは、その経験に関する情報を、最低五十年、可能なら永久に秘密にしておきたいと願っていた。が、実際にはどうなるのかは、彼らにも予測がつかないのだった。
ガラス壁のこちら側でスピーカーが音をたてた。
「気分はどうかね」
男の表情には変化はなかった。ただモニターのいくつか、脈拍と脳波に、わずかの変動が表示されたにとどまった。
「かわらない。特に悪くもないし……」
「よくもない？」
その問いは、男の口もとに皮肉げな笑みを呼んだ。
「この状況で気分がよくなれるとすれば、かなりかわった趣味の持ち主だ」
「体調はどうかね」
「いいか悪いか、ではなくて、変化は、という意味でなら、ない」
「いいか悪いか、では？」
「いいね、とても。そのガラスをぶち破って、あんたらに直接、挨拶ができそうだ」
ガラス壁の向こうでは、何人かがぎょっとしたように身をひいた。

「それは遠慮しておいた方が賢明だ」
「だろうね」
皮肉げな笑みを口もとに残しながら、男はいった。目には面白がっているような表情はみじんもない。
「――前回にひきつづいて、君の活動についての質問をしたいのだが」
「いいとも」
「話をすることについて、精神的な不快感や圧迫感はないのかね」
「話をすることそのものにはない」
「と、いうと？」
「話すという行為には何も感じない。だが話の内容には、少し、ある」
「何がある？」
「――苦痛だ」
「肉体的な？」
男はほっと息を叩いた。
「ちがう。精神的な苦痛だ。心の痛み、という奴だ」
「なぜかね」
「なぜ？」
男は少し驚いたように目をみひらいた。数値がいっせいに変化した。体表面の温度があ

がり、図形の色がかわった。
「楽しんだ、と思うのか」
「刺激的であり、人間誰しもがもっている破壊衝動を満たす活動だったのではないかね」
「そういう面があったことは認める。しかし、別の部分では苦痛があった」
「肉体的な苦痛ではなくて？」
「肉体的な苦痛はやまほど味わった。しかし体の痛みは自然に忘れる。そうだろ？」
スピーカーは沈黙した。
男は答えが得られなくても、さほど失望したようすは示さなかった。
「まあ、それも今となっては過去だ。ただ、大切なことがひとつだけあって、むしろそれ以外ほどうでもいいことだともいえる」
男の目が、ガラス壁の向こう側ではなく、どこかもっと遠くを見つめていた。
「何かね、それは」
スピーカーが訊ねた。
「それはな、俺が会って、話して、ときには戦った連中が、本当は誰ひとりとして、自分から望んであなったのじゃないってことだ。奴らは自分に起きることを、前もって何も知らなかった。考えてみれば、起きたことよりも、知らなかったってことの方が、よほど悪夢じゃないか。
どうだい？　そうは、あんた、思わないか？」

この続きは、書籍でお楽しみください。
◎注意
本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。
個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。